

萬福寺だより

第49号

太祖瑩山禪師讚仰御詠歌（法灯）

常永久に人を渡して今もなお

禪師の慈悲は世を照らすなり

作詞：久我尚寛 作曲：密言流光明

我々曹洞宗では、宋の国から正伝の仏法を伝えられた道元禪師を「高祖承陽大師」、その教えを広く日本全国に伝えられた瑩山禪師を「太祖常済大師」と尊称し、曹洞宗一人の祖としてお釈迦様と御一緒に「一佛両祖」としてお奉りしています。今回の御詠歌で詠われた瑩山禪師は曹洞宗における四代目の禪師様で、能登の總持寺（現在は鶴見に移転）を開かれた禪師様です。瑩山禪師は日本における曹洞宗の開祖として、強烈な存在感を放つ道元禪師とは少し異なる方向性ながら、多くの優秀な弟子を育て、多数の優れた書物を記し、道元様の説かれた教えを出家僧侶に限らず広く在家信者にも広められました。一般には曹洞宗興隆の礎を築かれた中興の祖として知られています。本年令和六年（西暦二〇二四年）は瑩山禪師がお亡くなりされた正中二年（西暦一三二五年）から七百年目の回忌の年に当たり、鶴見の大本山總持寺におきまして大法要が行われる事になっております。

今回御紹介させて頂いた「太祖常済大師瑩山禪師讚仰御詠歌」は、瑩山禪師のお示しになった教えと御遺徳を仰ぎ讃えるお歌です。御詠歌の意味は次の通り

『瑩山禪師は苦しみや悲しみ、不安や愚痴に迷う人々の心に永久なる法の灯火を与えられました。禪師のお示しになった慈悲の教えは、この世に生きる全ての人々の心をどこまでも、いつまでも照らしてくださいませ』
歌詞には「常済大師」の「常済」の二文字が読み込まれています。「常」はいつまでも変わ



（上）『木像瑩山禪師の坐像』：瑩山禪師とも縁深い山禪師の坐像。瑩山禪師の坐像は、山禪師の坐像に似ている。瑩山禪師の坐像は、山禪師の坐像に似ている。瑩山禪師の坐像は、山禪師の坐像に似ている。

らずに、永遠に。「済」は川や難路を無事に通れる様に渡す、苦しみからの救済を意味し、仏道によって悟りに導く事を意味します。お釈迦様の教えは、しばしば暗い夜道を照らす明かりに例えられます。曲名の「法灯」とはお釈迦様から代々受け継がれてきた仏法の光で煩惱の闇を照らし、安らぎをもたらす様を表しているのです。歌詞にもあるように、瑩山禪師は「慈悲」の教えを重視されてきました。

お釈迦様は「慈悲心」とは四つの「無量心」に限りなく豊かな心から成り立つと説かれています。

「慈無量心」相手に安心出来る、心地である

「非無量心」相手の不安や悲しみの元である

「喜無量心」相手の「楽」を共に喜ぶ気持ち

「捨無量心」好きな相手・嫌いな相手、愛憎の執着から離れ、平等に應える気持ち。

このうち「慈」と「非」を合わせて一般に「慈悲」と呼ばれます。即ち「慈悲」とは「自他を区別する事なく、苦楽を共にする事」だと言えるでしょう。苦楽を共にする事で共に喜び合う「喜」の心が育ち、互いに支え合う喜びは分け隔ての無い「捨」の心に繋がります。益々慈悲の心が育って行きます。そうやって数多の人々の心に宿った温かな法の灯火こそが、世を照らす光となるのです。

瑩山禪師が御活躍された鎌倉時代は、二度の蒙古襲来や相次ぐ戦乱で、人々の心も荒れた時代でありました。また瑩山禪師ご自身もお若い頃はご自身の瞋恚（怒りやすい・激しやすい心）を持って余す事もあった様です。ですが、その暗い世相にも自分自身の性分にも負ける事無く、瑩山禪師は慈悲の教えを説かれました。

全世界規模の大災害となったコロナ禍、相次ぐテロと戦乱の連鎖。今なお困難と混乱の絶えない現代を生きる我々であるからこそ「怒り」と「憎悪」では無く瑩山禪師の「慈悲」の教えを学び、次代への灯火として伝えていく必要があるのです。

◇お知らせ◇

☆コロナ禍の為、縮小開催しておりました
 彼岸会・施食会・盂蘭盆会等のご法要を、本年より通常規模で開催予定です。
 山内一同皆様お揃いでのお参詣をお待ちしています。

☆昨年令和五年夏に、萬福寺墓地奥に合葬墓『無量寿苑』を増設致しました。これに併せて墓地奥本堂裏手側に水屋・桶置き場を新設致しました。新しい水屋は高さも多少高くなり、屈まずともご利用頂けるようになりました。



(上) 墓地奥に増設した合葬墓
 (右) 墓地奥に新設した水屋・桶置き場
 奥の方の墓地の方以外でも、お盆中等水屋が混み合う時にご利用下さい。

☆墓地お供物について☆

当山萬福寺墓地におきましては、墓参の際にお供えになった菓子・飲料品等をお参りに後にお持ち帰り頂きますよう御願いしております。

そのままお供えして下さるとカラス・鼠等が墓前を荒らす他、酷暑・寒冷時にお供え物の缶が破裂し、通路・墓石を汚損する被害が出る事があります。墓地の清潔を保つ為、何卒皆様の御協力・御理解を御願致します。

◇通般若帳◇

『願わくはこの功德を以て普く一切に及ぼし 我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん事を』これは「普回向」と言う回向文(読経・修行で積んだ功德を何の為の物か読み上げる文)で、境内観音様前の鐘台にも刻んであります。功德を自分一人の物にするのでは無く、あらゆる命に捧げ、共に悟りを開きましようという意味合いの回向文です。

瑩山禅師の有名な逸話でこのような物があります。禅師はお若い頃、生真面目の故かカツと怒りやすい所が有りました。ある時修行僧に心ない言葉を掛けられ、怒りに駆られるまま相手を殴りつけようとした時、ある光景が臉の裏に浮かび踏み止まりました。それはお母上である懐観大姉が、観音様に一心にお祈りしている姿でした。怒りに駆られての暴力は、仏教の戒律で固く禁じられた行為です。懐観大姉は瑩山禅師の激しい気性を心配し、毎日観音様にお参りをしていたのです。そのお姿を思い出された禅師は、これより後は怒りに惑う事も無く人当たりも柔らかくな

り、修行僧達からも以前にも増して信頼を寄せられる様になったそうです。

懐観大姉の祈りの姿の様に、我々が日々積み重ねた功德が、仏教徒として生きる一助となる事を祈り、御挨拶と代えさせて頂きます。

月例行事のご案内

- ◇坐禅会◇
- 第二土曜日午後五時半より
- ◇お写経会◇
- 第四土曜日午後一時より随時
- ◇御詠歌会◇
- 第二・第四火曜日午前十時より
- ◇ヨーガ教室◇
- 毎週木曜日 午前九時半より
- ◇遊書の会◇
- 第一・第三水曜日午前十時より

◇感謝録◇

- 水屋しめ縄奉納
 為木村家先祖代々菩提
 施主 木村重直 殿
- お大師さま頭巾・前掛け奉納
 施主 檀信徒有志の皆様
 本堂・山門外壁工事志
- 施主 鈴木艶夫 殿
 高橋亮一 殿
 みち子 殿
- 米寿記念 仏具料奉納
 施主 伊藤正治 殿

和尚の独り言

☆ 昨年久しぶりに永平寺へ拝登してきました。コロナの影響もあって六年ぶりのことでした。伽藍や周りの山々の佇まいは静寂にまつまれば以前と変わることはありません。しかし、参拝者の賑わいは以前とは比べられないほど少なくなっています。(修行道場としては、とても良い環境と言えますが)そして、朝のお勤めに随喜してビツクリしました。修行僧の数が極端に少ないのです。聞くところによると修行僧の数は百五十人程だそうです。因みに私が修行していた五十年前の半分の人数になってしまったのです。

☆ 八十年代以降の少子化の要因として、非婚化・晩婚化・晩産化が挙げられています。そして、これらの要因が寺院後継者の減少にも現れているという事です。修行僧の数が半減するのと何が大変かといえば、作務(お掃除)をはじめ永平寺の維持が難しくなることです。今の修行僧は、私達の時代の倍の仕事をしなければならぬと言いうことになりました。(大変だー)

☆ 少子高齢化が進むと過疎化に繋がります。過疎が進み人口が減ってくると、お檀家の数も減ってきます。同事に寺院の後継者も減ってきます。その結果寺院の廃寺や合併が既に現実の問題として生じています。

「萬福寺だより」第四十九号

発行 令和六年一月五日
 発行所 聖閣山 萬福寺
 発行人 垣内 善勝
 東京都葛飾区柴又六の十七の二十
 電話 三三五七―四五八八
 FAX 三六五七―八五六三

萬福寺だより

第48号

追善供養御詠歌（妙鐘）

うちならず鐘のひびきはそのままに

三世の仏のみ声なるらん

法恩供養御詠歌（澄心）

消えてゆくかねのひびきに聞き入れれば

いつか澄くるわが心かな

作詞：赤松月船 作曲：安田博道

仏教寺院には鐘がつきものです。未だ時計の無い（大らかな）時代、人々は朝の鐘を聞いて目を覚まし、暮れの鐘を聞いて家路に就きました。

「夕焼け小焼け」の歌にも「山のお寺の鐘が鳴る」と歌われた日本の原風景の一つと言えるでしょう。

鐘と言えば、年末年始のこの時期に皆様が思い浮かべるのは大晦日の除夜の鐘でしょうか。参拝者が鐘楼前に列を作り、百八つの鐘の音で煩惱と汚れを祓う恒例の光景も、昨今では中々見かけなくなつて参りました。当山萬福寺では、先代賢道和尚の意向により、境内に梵鐘がありません。子供の頃は、境内に梵鐘がありました。近年住宅地内の寺院で鐘の音が「騒音問題」等とワイドショーで取り上げられたり、一部の観光客等に

ガンガンと遊び半分で乱打されている様子を見るに、賢道和尚には先見の明があったと言えるでしょう（当たつて嬉しい事ではありませんが）

除夜の鐘と言えば、大晦日にテレビ放映される永平寺の大梵鐘が有名です。とても大きな鐘で、良い音色で響かせる為には躊躇を捨てて全身で思い切り撞く事が必要である事は以前の寺報で紹介させて頂きましたが、永平寺の鐘は大梵鐘だけではありません。夏には法堂横の承陽殿前に有る承陽鐘と言う鐘が毎夜百八回鳴らされます。（大梵鐘と比べれば）



小振りな鐘ですが、伽藍に響くコーンと言う音は耳と心に優しく響き、修行中は励まされ鐘を撞く役目を楽しみにしていた事をよく覚えております。この様な梵鐘以外にも、法要の開始を告げる殿鐘、坐禅の始まりを知らせる止鐘等寺院の中には鐘の音が満ちており、未だに鐘の音を聞く度に心が引き締まり背筋の伸びる思いが致します。

我々僧侶が梵鐘を撞く時には「仏さまの声を聴くように心して撞く」と言う事を教えられます。そし

てひと撞き毎に礼拝して

「三途八難 息苦停酸 法界衆生 聞声悟道」

（どのような苦境に有る人も、様々な苦しみから逃れる事ができ、あらゆる命がこの鐘の声を聞いて、悟りを得る事ができるように）とお祈りをお唱えします。上の写真に写っている萬福寺観音様前の鐘の台座にも、

「願わくはこの功德をもつて普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん事を」静かに一度だけ鳴らし 右の偈文をお唱えしましょう」と刻まれています。お参りの際は心を込めて静かに一回鐘を撞き、右の偈文をお唱え下さい。

鐘の音とは祈りの声に他ならず、余韻を伴って虚空に溶けていく鐘の音は、三世へ過去現在未来と移りゆく時代の中で語られてきた諸仏の説法（妙音）であり、聞く者を仏教の教えに目覚めさせる働きがあるともされています。鐘を撞く人、鐘の音を聞く人、それぞれが鐘の音に集中する事で、心が少しづつ穏やかになり、煩惱のさざ波が鎮まり、心の水が澄み渡つていく。その様な情景がこの御詠歌には詠われているのです。

流石に皆様のご自宅で梵鐘を、と言う訳には行きませんが、お仏壇の前に座りおりんを鳴らす時は姿勢を正しおりんを静かに鳴らし、心を込めてお祈りしましょう。その祈りの声と姿は過去の仏様達だけでは無く、未来の仏様の教えを守り伝える人達に繋がって行く筈です。そうやって過去からの授かり物を現代の私達が未来に伝えてゆく事こそが、何よりの追善供養であり法恩供養になるのではないのでしょうか？

垣内弘道（聖山）

◇ 通般若帳 ◇

昨年までの『編集後記』のコーナーですが、住職より以前から「ネーミングセンスが悪い」と駄目出しをされていた為、無

い知恵を絞って命名してみました。名前の由来は「大般若経」の一節「無位の真人、面門に現ず、智慧愚痴、般若に通ず、靈光分明にして大千に輝く、鬼神いずれの所に手脚を着けん」の「般若に通ず」より。この一節は大般若経の経本をバラバラと流し読む「転読」の際に唱えられる偈文でもあります。この偈文は道元禪師が痘瘡(天然痘) 除けの偈文として使われた事もあるそうなので、コロナ禍の現代にも即した命名であると自負しております。

さて、そのコロナ禍のおおりに受けて練習を自粛していた萬福寺梅花講ですが、この三年間の間に新規入会者を二人お迎えする事が出来ました。東京都内の梅花講で会員数を増やしている講は中々無いそうなので嬉しいお知らせです。先日、講員さんの御紹介で見学者の方がいらっしやいました。お話を伺うと、たまたまテレビの旅番組で御詠歌をお唱えしている場面が映り、ご自分の御祖母様が同じお稽古をしていた事を思い出して見学いらっしやったそ

うです。ご自宅が遠い事と、今はお忙しいとの事で入会は又の機会にとの事でしたが、ご縁があれば来年にも新規の会員さんがふえるかもしれません。曹洞宗梅花流詠賛歌の成立は昭和二十七年と比較的最近ですが、仏様の教えを歌でお唱えする事自体の歴史は古く、インドの古語サンスクリットで歌われた梵讃、中国語で歌われた漢讃、霊場の巡礼時に詠まれた和歌に巡礼者達が節を付けて歌った和讃などが御詠歌の源流ともされています。お寺に集まり大勢でお唱えする御詠歌は、檀信徒の交流の場として多くの方に親しまれてきたようです。十数年前までは、全国各地で開かれる奉詠大会に多くの方が参加され、大変な賑わいぶりでした。そんな梅花流詠賛歌ですが、近年では講員さん達の高齢化、コロナ禍による稽古・発表の場の減少・中止により全国的に講員さん達が激減し、消滅の危機にあります。一度断絶した文化を再興する事は容易な事ではありません。ですが、僅かでもご縁があれば、繋がりと

梅花流詠賛歌を未来に繋げる為、仏の祈りを次代に継承する為、萬福寺梅花講では御参加をいつでも歓迎致しております。(弘道)

月例行事のご案内

- ◇坐禅会◇
- 第二土曜日午後五時半より
- ◇お写経会◇
- 第四土曜日午後一時より随時
- ◇御詠歌会◇
- 第二火曜日午前十時より
- ◇ヨーガ教室◇
- 毎週木曜日 午前九時半より
- ◇遊書の会◇
- 第一・第三水曜日午前十時より

◇ 感謝録 ◇

水屋しめ縄奉納
為木村家先祖代々菩提
施主 木村重直 殿

お大師さま頭巾・前掛け奉納
施主 檀信徒有志の皆様

仏具料

為聖光院徳芳清富大師
為精勤院寿翁徹正居士
為清廉院寿徳妙道大姉
為秋月清操信女
施主 伊藤正治 殿

本堂・山門外壁工事志
施主 石亀久芳 殿

和尚の独り言

☆昨年はロシアによるウクライナ侵攻という、想像だにしなければ侵略戦争に驚きを隠せませんでした。しかし、よくよく考えれば八年前にロシアはクリミアに侵攻していたわけですから、私達の考えが甘かったと言えはそれまでです。クリミア侵攻の時は遠いよその国の出来事としか考えなかつた私達が、正に平和ぼけであつたのでしょうか。日本を含めて西側諸国の報道も、地域の民族紛争ぐらいにしか伝えていながつたことも影響しているでしょう。

☆お釈迦様のお生まれになつたカピラ国は、常に隣の大国コーサラ国の脅威にさらされてきました。コーサラ国の瑠璃王は進軍の途中でお釈迦様と出会つたならば兵を引き上げると命令されてきました。そこでお釈迦様はコーサラ国が攻めてくると坐禅をして三度侵略を止めさせました。しかし四度目の時には坐禅で抗議することなく、釈迦族は滅ぼされてしまつたそうです。蛇足ではありますが「仏の顔も三度まで」は、ここから来ているとも言われています。人類の歴史は有史以来、戦争の歴史です。その度に数え切れない人々の命が失われてきました。その度に平和が唱えられてきました。しかし又同じ事の繰り返しです。なんと愚かなことでしょうか。「法句経」に「まこと、怒みごころは、いかなるすべをもつとも怒みをいなくその日まで、この地上にはやみがたし。ただ怒みなきによりてこそ、この怒みはやむ。これ易(かわ)りなき真理なり」と示されています。深く味わいたいものです。

☆ウクライナでは今日も罪も無い多くの市民が犠牲になっています。いつの戦争も犠牲になるのは一般市民です。極寒の地でライフラインを狙つた爆撃は、実に非人道的な行為です。遠く離れた日本から私達に出来ることは、避難を余儀なくされているウクライナの人々を物心共に支援することぐらいしか出来ません。そして一日も早くこの戦争が終わることを祈ることしか出来ません。



「萬福寺だより」第四十八号
発行 令和五年一月五日
発行所 聖閣山 萬福寺
発行人 垣内 善勝
東京都葛飾区柴又六の十七の二十
電話 三三五七-四五八八
FAX 三六五七-八五六三

萬福寺だより

第 47号

梅**ばい**花流詠讚歌
かりゆうえいさんか

大聖**だいしょう**釈迦**しやくかに**如来**よらいじょうどう**成道**ごうごえい**御詠歌**みようじょう**
みようじょう (明星)

明あけの星**ほし**仰ぐ**うやむ**心は人の世の

光あめつちとなりて天地あめつちにみつ

この原稿を書いている十二月上旬、世間はコロナ禍にも負けずクリスマス一色となっています。同じ時期、修行道場である永平寺では例年と変わらずに臘八摂心(ろうはつせっしん)が執り行われています。臘八摂心とはお釈迦様が十二月の一日から一心に坐禅修行に打ち込まれ、八日目の朝明けの明星が輝く頃にお悟りを開かれた故事にならない、終日坐禅修行に打ち込む集中修行期間の事です。雪掻きなど永平寺維持に係る仕事もあるので、全ての雲水が坐禅修行に参加する訳ではありませんが、私は運よく天候にも恵まれ全日程で参加出来ました……何故か当時在籍していた寮舎で、全日程の参加を希望したのは私一人で、その後周囲から変人扱いされる事になりましたが(苦笑)残念ながら悟りの境地には至れず、ひたすら足が痛かった八日間でしたが、僧堂前雪囲いの間から明けの星を眩しく仰ぎ見た事を今でも良く覚えています。

お釈迦様は悟りの瞬間を「明けの明星の輝く中で、私も大地も生きている全てのものが同時に悟りを開いた」と説かれています。大聖釈迦如来成道御詠歌(明星)の歌詞は、そのお言葉から作られました。では、お釈

迦様が開かれた「お悟り」とは一体どのようなものなのでしょうか？

お釈迦様はお悟りになられた内容を「縁起の法」と説かれています。縁起とは「全ての現象は、原因や条件が相互に関係しあつて成立しているものであり、独立自存のものではない」「故に、条件や原因がなくなれば結果も成立しなくなる(無くなる)」と云う考え方です。例えて言うならば「蠟燭が燃える」と云う事象を「蠟」という可燃物、「燃焼を可能とする酸素」と云う条件に



(上) ブッダガヤ、大菩提寺の菩提樹
 お釈迦様は菩提樹の下でお悟りを開かれた。
 後の仏教弾圧で伐られ、現存するのは接ぎ木として保存された三代目
 (スリランカで接ぎ木された樹が里帰りした物)

「着火するに足る熱エネルギー」と云う原因が重なる事で「蠟(可燃物)が無くなるまで、高熱と光を発する燃焼反応が継続する」と云う結果が生じると分析するようなものです。これ等の条件、原因の何れか一つが欠けても「蠟燭が燃える」事にはなりません。同様に人生における苦しみにもその条件と原因が有り、その結果として苦しみが成立してしまいます。故に、その条件と原因を除去する事で、結果は苦しみも成立しなくなり消滅する事になるのです。「縁起の法」が別の言い方で「因果」と呼ばれる所以です。

縁起の法を体得されたお釈迦様は、次にその真理をどのような方法で人に伝えたら良いのかと考えられました。そこで具体的な人の生き方としての「四諦(したい)説」を示されたのです。四諦とは四つの真理の事で、苦諦(くたい)・集諦(じつたい)・滅諦(めつたい)・道諦(どうたい)を言います。四諦説の説

明には、よく病気を治す例えが用いられます。其の一「苦諦」は「症状」を知る・自覚することです。そしてこれが何よりも重要な事なのですが、本当に苦しい時人間はそれを自覚できない事が有ります。周囲の方との触れ合いの中で「普段とは様子が違う」と、本人に伝える事はとても大切な事なのです。其の二「集諦」は病気の「原因」を知ることです。症状と原因の特定ができれば、治療を始める事が出来るようになります。其の三「滅諦」は病気が治った健康状態のことです。体に無理の無いバランスの取れた状態に戻す為には、適切な目標を定める必要があります。其の四「道諦」は正しい治療と薬、即ちお医者様の指導にお釈迦様の教えに従った適切な療法・修行を指すとされます。薬も飲み方や分量を守らなければ毒になり、リハビリも過ぎれば体を壊します。何事も専門家の指示に従う素直な心が大事です。

滅諦(健康状態)に至る為には、苦しみの原因を取り除く正しい行動を繰り返すしかない、お釈迦様は坐禅修行において確信なされました、これこそがお釈迦様の開かれたお悟りに他なりません。

お釈迦様は悟りを開かれたその時から、世界全てのものが「縁起の法」の中に生き、それを自覚して学び、あるべき姿で行じ救われる事を願い、教えを示されました。

「人の世の光となりて天地にみつ」とは、その願いを継承し自分達も伝え行く事を誓う言葉でもあるのです。

◇ 編集後記 ◇

『親の説教と冷酒は後から効く』
 という言葉があります。
 お酒を嗜まない方に後者の諭えは理解しにくいかもしれません。「耳や頭の痛みと共に叩き込まれた経験は薄れる事無く記憶に残り、理解できる状況に自分が立つて始めてその有り難みが理解できる」「受け入れやすい意見ばかり飲んでいると後で後悔する羽目になる」そんな意味合いの言葉だと

が、常に心の片隅に刻んでおけば、邪心が心に忍び込んだ時にワクチンの働きをしてくれる事でしょう。コロナ禍の現在、お寺にお参りされる方もコロナ以前に比べれば少なくともなっていました。もう少しコロナが落ち着いてから「心のワクチンの定期接種」として参拝頂ければ幸いです。(彼岸会・施食会・盂蘭盆会等では、本堂外からの御焼香もできるように準備してあります)



(上) 萬福寺境内・お大師さま
 有志の皆様にご参り頂いた前掛けと
 紅葉の紅が緑に映える

思います。昨年コロナワクチンを打った後の痛みを感じながら、その様な事を思いました。

この一年で、住職は二回の心臓手術を行いました。きっかけは住職の息切れに気付いた母の「お医者さんにいった方が良くない？」

ワクチンの仕組みとは、体内の免疫に排除すべき病原菌を記憶させ、免疫機構が効率よく動ける環境を作る事で、人によっては「防犯訓練」に例える事もあるそうです。お釈迦様の教えの根本は諸悪莫作衆善奉行・人の悲しむ悪い事をしてはいけません、人に喜ばれる良い行いをしましょう、ということです。簡単に見える教えです

と一言で済ませた。住職は「歳の所為だろう」と言っておりました。が、検査の結果は心房細動というものでした。仏道の第一歩は「苦諦」苦しみの自覚にあります。コロナ禍で人と人との繋がりが希薄になって今だからこそ、身近な人への思いやりと気遣いを大切にしたいものです。

子供の頃大人から叱られた事の意味を大人になって始めて気が付くように、お釈迦様の教えも見聞きしたその時には実感が湧かなくても、ある時突然に自分の実感として悟れる一瞬が訪れます。年一回、紙面を借りてお話ししている内容が人生のワクチンとなる事を祈り、今年こそコロナ禍が終息する事を願って新年の御挨拶に代えさせていただきます。(弘道)

月例行事のご案内

- ◇坐禅会◇
- 第二土曜日午後五時半より
- ◇お写経会◇
- 第四土曜日午後四時より
- ◇御詠歌会◇
- 第二火曜日午前十時より
- ◇ヨーガ教室◇
- 毎週木曜日 午前九時半より
- ◇遊書の会◇
- 第一・第三水曜日午前十時より

◇感謝録◇

- 水屋しめ縄奉納
 為木村家先祖代々菩提
 施主 木村重直 殿
- お大師さま頭巾・前掛け奉納
 施主 檀信徒有志の皆様
- 仏具料
 為精勤院寿翁徹正居士
 為清廉院寿徳妙道大姉
 為秋月清操信女
 施主 伊藤正治 殿

和尚の独り言

☆「和尚の独り言」の文字を大きくしました。平成五年の創刊時は和尚も三十代、チョット気恥ずかしさも文字は小さくしました。時を経て七十を過ぎると少し凶々しさが増したことも多分にあると思いますが、何より自分で自分の書いた文章が全く見えないのです。

☆さて、この二年ほど世界は新型コロナウイルスの影響で、私達の生活環境は一変しました。当初、宗教施設でのクラスター発生が多く、当山でも「施食会」法要を中止したりもしました。昨年後半からは感染防止の方法も確立され、徐々に行事も復活し始めました。とはいえ完全復活には程遠く、早く以前の日常が取り戻せる日を望むばかりです。

社会経済活動の復活が喫緊の課題ではありますが、寺院に於けるコロナの影響について全日本仏教会や曹洞宗でも調査が実施されデータが公表されました。それによると昨年一年間で中止または延期された行事は七五パーセント、御法事の中止や延期も半数に上り収入は三割減だそうです。当山のデータも概ね同様です。これらの数字は社会一般の経済活動も同様のデータが出されておりますので、お寺も世の中の社会活動と連動していることを改めて感じさせられました。

☆コロナ禍によってもたらされた日常生活の変化の中、今後元に戻ることなく受け入れていかざるを得ない生活様式もあるでしょう。ウィズコロナ、アフターコロナと喚ばれる新しい生活様式と向き合って行かざるを得ません。そのような環境下、私達が自分を見失わずに生きていくには何が大切なのでしょうか？私は次の三点だと思えます。(一)人と人のつながりを大切にすること (二)利他の心を持つこと(慈愛を持つて人に喜ばれることをする) (三)過去にとらわれず、未来に多くを望むことなく「只」今を生き抜くだけではないでしょうか。

今を正念場とし、逃げず追わず、ドツシリと腰を据えて生きていきたいものです。

青山俊董老師からご寄贈頂いた本に「私の人生を創ってゆく主人公は私でしかない」と揮毫いただきました。この言葉を皆さまにもお送りしたいと思えます。



「萬福寺だより」第四十七号
 発行 令和四年一月五日
 発行所 聖閣山 萬福寺
 発行人 垣内 善勝
 東京都葛飾区柴又六の十七の二十
 電話 三六五七一四五八八
 FAX 三六五七一八五六三